中脇初枝論

地で血を祓う中脇初枝

西山利佳

中脇初枝は何でできてる？　――『魚のように』から

中脇初枝の誕生日は一月一日だ。過剰に特別感がある。

オフィシャルサイトの経歴によると、一九七四年一月一日徳島県に生まれ、二歳の時に高知県中村市（現四万十市）に移ったという。一九九一年、県立中村高校三年在学中、一七歳のときに第二回坊ちゃん文学賞[注1]を受賞する。受賞作「魚のように」は、同タイトルで一九九三年三月に新潮社から出版された。

最初の作品にはその作家の全てが含まれていると言われるが、『魚のように』を読むと、最近作『わたしをみつけて』（ポプラ社　二〇一三）に至る「中脇初枝」の要素がやはり目に飛び込んでくるのだった。

それは、家族・名前・柳田国男。

『魚のように』は、高校一年の「僕」有朋（ありとも）の一人称で語られる。父が単身赴任中、一つ違いの姉清文（きよふみ）が家を出てしまう。母親と二人残された僕は「家族に対する義務と責任を遂行する為にではなく、放棄する為に家を出た」（p.4）。川を遡上し家からの逃避行中、姉とのあれこれが回想される。母親の「盲目愛」に苦しめられてきた姉弟の危うく尖った感性が、流れるように展開していく。

さて、「僕」の名前「有朋」はありだろう。しかし、姉の「清文」はどうだ？

そして、柳田国男。「僕」は、雨の中、谷間の道で小さな草履を見つけてひどくおびえてしまう。「この時の僕の感覚を柳田国男ならきっと分かってくれるだろうと思う」（p.35）。一七歳の中脇初枝には、すでに柳田国男は近しい存在だったわけだ。翌年筑波大学に進んだ中脇は、メルヒェン研究の第一人者小澤俊夫に学んだと聞く。

血のつながり――『祈祷師の娘』

四作目『祈祷師の娘』（福音館書店　二〇〇四）が最初の児童文学作品である。（二〇一二年にポプラ文庫ピュアフルに収められた。以下、引用はポプラ文庫から行う）

主人公「春永」は一三歳の少女。祈祷師の家に暮らして